



ちょっとひといき 読者ひろば

『2018年5月号の課題』

コンビニが一階にあるマンションに住んでいた私。自宅に冷蔵庫も置くこともなく、コンビニを冷蔵庫とみなして生活をしていた。当時の私はコンビニ利用者としてコンビニシステムに組み込まれていた。毎朝目覚めて、一回のコンビニへ直行、そのまま通勤。深夜帰宅後もまた、コンビニでお弁当を購入。休みの日も当然に、しまいには、眠れぬ深夜のトイレへ行くついでさえコンビニ詣で。

これだけ一階のコンビニに行き詰めると、自然に店員とも顔見知り。毎日顔を合わせる相手ではあるけれど、そこにはお定まりのフレーズだけ。全くの他人ではないが、知人でもない、システムチックなコンビニ空間の中で生まれる適度な距離感。それが逆に気持ちよかったりする。

(村田沙耶香、「コンビニ人間」)

佳作

我住的公寓一楼有家便利店。我房子里没有冰箱，把便利店当做冰箱生活着。当时我做为便利店利用者，被编入便利店系统。每早一醒来就跑到一楼的便利店，直接上班。晚上回家后，又打饭去便利店。假日也是当然的，最后，夜晚睡不着去洗手间，顺便走去便利店。

这么经常去便利店，自然认识到服务员。他们是每天见到的，可是每次都一个样打招呼。他们不是陌生人，也不是很熟识的。这样，有系统的便利店产生恰好的距离感。这却让我心情很舒畅。(福元惠子)